

藤原・吹田病院院長

放射線治療後の症例研究で成果 米学会などで世界初報告を2本

吹田徳洲会病院（大阪府）の藤原聖輝・放射線治療科医長は、放射線治療後の後遺症に関する世界初の症例報告を2本行った。ひとつは10月1日から4日間、米国カリフォルニア州で開催された第65回米国放射線腫瘍学会で、「大建中湯による前立腺がんIMRT後の晩期直腸出血の低減効果」をテーマに発表。もうひとつは、国際インターネットジャーナル『キュレウス』に、「海馬回避予防的全脳照射後に海馬周囲の髄膜癌腫症を発症した小細胞肺がん症例」と題する論文を掲載した。

漢方薬用い副作用低減

「大建中湯による前立腺がんIMRT後の晩期直腸出血の低減効果」は、前立腺がんに対する放射線治療の後遺症（晩期副作用）である放射線直腸炎による直腸出血を、漢方を用いて低減したという報告だ。

前立腺がんの根治放射線治療では、IMRT（強度変調放射線治療）が治療効果を飛躍的に向上させたが、後遺症として放射線直腸炎を生じることがある。この副作用を低減するため、CT（コンピュータ断層撮影）で位置合わせをしてから照射するIGRT（画像誘導放射線治療）や、直腸壁と前立腺の間にゲル状のスペーサーを留置することで、前立腺と直腸を物理的に離すハイドロゲルスぺーサー留置といった技術が一般的になっている。

藤原医長は「体外照射による放射線治療は、非侵襲であるこ

とが本来の目的であり、ハイドロゲルスぺーサーのように侵襲的な治療を組み合わせるのは患者さんの負担になる可能性があります。世界的には、投薬で放射線直腸炎を低減しようとする試みはほとんどないのが現状です」と指摘する。

また、前立腺がんに対し放射線治療を行う際、直腸径が広がり前立腺と密着すると、直腸壁も高線量で照射されるため、事前に便秘に対する治療を行う。藤原医長は、放射線腸炎の治療に大建中湯を用いた症例報告や、大建中湯が術後腸閉塞の予防に有効であることを証明する論文を読んでいたこと、また、大阪大学で後期研修医をしていた頃、大阪府内の小池外科（小池剛史院長）で、多くの高齢患者さんに対し大建中湯による便秘治療を経験していたことなどから、今回の治療に結び付いた。

放射線直腸炎は、放射線による慢性炎症から組織の線維化が起こり、直腸壁が血行不順に陥って組織の脆弱性、組織壊死、局所出血につながる。一方、大建中湯の作用メカニズムは複雑であり、リンパ組織誘導性

ILC3に作用することによる抗炎症効果が指摘されたり、TGFβ1経路を介して線維芽細胞の活性を抑えることで抗線維化効果を示すことが報告されたり、複数の経路に作用している可能性がある。そこで大建中湯の抗炎症効果や抗線維化効果が放射線直腸炎を低減すると仮説を立てた。

発表では、2014～21年で前立腺がんに対しIMRTを実施した102例のうち、便秘治療で大建中湯を服用していた46例が対象。治療後3カ月間も服用を継続したところ、治療が必要な直腸出血が生じた例はゼロという結果となった。

藤原医長は「今後は放射線による慢性炎症に対し、大建中湯がいかなる効果を発揮しているのか、基礎医学的な機序解明を大学や各種学会を通じて働きかけていきたい。今回は臨床から新しいエビデンスにつながる知見を発見でき、まさに“目前で悩む患者さんこそ、明日の医学の教科書である”ということを実感しました」と強調する。

新技術普及に注意喚起

「海馬回避予防的全脳照射後に海馬周囲の髄膜癌腫症を発症した小細胞肺がん症例」は、IMRTの技術で放射線照射を回避した海馬から、髄膜癌腫症という致命的な転移性腫瘍が出現したことに伴う症例報告だ。

海馬回避予防的全脳照射とは、記憶の中枢である海馬をIMRTの技術により回避することで、脳に放射線が照射された際の後遺症である神経認知機能低下を防ぐ最先端技術。ただし、すでに脳転移のある患者さんの場合、避けた海馬から腫瘍が再発することが懸念されていた。

そこで、小細胞肺がんの患者さんに行う予防的全脳照射で、この技術を施行するランダム化比較試験が行われ、その結果、海馬回避予防的全脳照射群は明らかに神経認知機能低下を防いだというハイエビデンスが確立。避けた海馬からの腫瘍発生リス

サービス付き高齢者向け住宅「巨椋の郷」は10月12日、所在地（京都府宇治市槇島町一ノ坪26-3）で竣工式を行い、11月1日にオープン、同サ高住に居住する方の通所介護サービスもスタートした。同施設は鉄筋コンクリート造の地上5階建てで、宇治徳洲会病院から徒歩5分の近距離に立地し、同院がサ高住や通所介護サービスの利用者さんの医療面を全面的にバックアップする。

神事後の挨拶のなかで宇治病院の末吉敦院長は、社会の高齢化にともない高齢者が安心して生活できる住宅が不足している現状を指摘し、「急性期医療のことだけを考えていては地域の方を守れません。高齢でも障害があっても安心して地域で暮らしていけるよう、地域包括ケアシステムの構築に貢献していきます」と思いを語った。

上田敏博施設長は同地域に高齢独居の方が多くことに触れ、「介護が必要でない方でも、おひとりでは不安なこともあると思います。そういった方にも利用していただければ」とピーアール。同施設では職員が毎日、部屋を訪ね異変がないか確認、緊急時はもちろん、細かい相談にも応じる。「職員一同、地域に愛される施設になるよう尽力してまいります」と上田施設長は笑顔で抱負を語っていた。



宇治病院から徒歩5分の場所に建つ巨椋の郷



「介護の受け皿がないと地域での暮らしは成り立ちません」と末吉院長

クは、5%と低リスクであると報告された。

この試験データをもとに藤原医長は論文を執筆、“5%”のうち最も致命的になる髄膜癌腫症が出現した症例について報告した。「髄膜癌腫症から癌性髄膜炎に発展すると命にかかります。恐らくこの症例は、世界中の病院が経験していると思いますが、まだ世界の誰も症例報告していませんでした。新しい技

術はリスク&ベネフィットを正確に理解したうえで、適切に普及されることが重要です。早期に髄膜癌腫症を発見できれば治療も可能になりますので、放射線治療後の丁寧な脳のチェックが必要になります」と指摘。

さらに「今回、対象となった患者さんから、社会的な貢献に自身を役立ててほしいという希望があり、今回の症例報告を書き上げました」と謝意を表す。

仙台病院

ISO9001認証更新

継続した業務改善など推進



マネジメントシステムなどについてヒアリング

仙台徳洲会病院は品質マネジメントに関する国際規格であるISO9001認証を更新した。同院が同認証を初めて取得したのは2017年。認証の有効期間は3年間で、20年に1回目の更新を行った。今回は、22年4月に新築移転したことを受けて行われた特例審査に合格。これは、施設の状況が大きく変わった場合などに実施する審査だ。同院に併設する介護老人保健施設（老健）シルバーホームいずみなど関連施設・事業所を含めて認証を受けた。

書類審査と訪問審査があり、訪問審査は2日間実施。4人の審査員が院内のラウンドや職員へのヒアリングを通じて基準を満たしているか判定する。審査項目にはリーダーシップ、品質目標、計画策定、文書化、パフォ

ーマンス評価、継続的改善など事項が並ぶ。年に2回の内部監査を行うことも必須事項となっている。

同院はISO認証取得を推進するため事務、看護師、薬剤師、診療放射線技師、リハビリテーションセラピストなど多職種のコアメンバーで構成するISO事務局会議を設置。毎週火曜日に開催し、ISO認証が求める水準の維持や受審に向けての準備などに取り組んできた。

コアメンバーのひとりである総務課の尾形英毅・課長補佐は「患者安全の向上やスタッフの働き方の改善などに関して、PDCAサイクルを回しながら院内を良くしていくことが、ISO9001認証取得の狙いです。当院は日本医療機能評価機構が実施している病院機能評価も取得していますが、ISOには継続した業務改善や目標設定・達成といった病院機能評価にはない視点があり、病院運営に寄与しているため認証を維持しています」と説明する。

徳洲会グループでは現在、同院以外に吹田徳洲会病院（大阪府）や同院に併設する老健吹田徳洲苑、老健あいの郷（埼玉県）がISO9001認証を取得している。

徳洲会広報部会

病院の経営改善をテーマに オンラインセミナーで講演

徳洲会広報部会SNS分科会は、第3回SNS勉強会をオンラインで開催した。テーマを「Instagram以外のSNS事例」と「Instagramを集患に生かす」の二本立てとし、前者ではまず生駒市立病院（奈良県）の松本哲明・総務課職員が「LINE」の事例を発表。LINEは特定の人物に情報を発信するのに適していると強調し、同院の活用事例や登録者数を増やす取り組みなどを紹介した。

次に南部徳洲会病院（沖縄県）の松山優司QIセンター事務局主任と佐々木賢登JCI事務局広報担当職員が「YouTube」の事例を発表。現在は患者さんへの説明用動画（健診センターでも視聴可能）や「教えて！ナントク」など19本をアップ、なかには1万再生を超えた動画もあり、その動画の分析などを詳細に示した。

続いて「Instagramを集患に生かす」にテーマを移し、吹田徳洲会病院（大阪府）の高山ひとみ看護補助者が「バースセンター」での取り組みを発表。家族の写真掲載承諾書は必ず取ること、病棟スタッフ全員で運営することが重要とし、検索にヒットしやすいタグ付け、ストーリーの活用など投稿のポイントを列挙した。

同分科会長で湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の町田詩織マーケティング課副主任は「機能的神経疾患センター」での取り組みを発表。疾患・治療、学術活動、日常など情報のバランスを取ることが重要とし、「SNSで有益な情報とは機能的価値（問題解決する情報）、情緒的価値（人の感情に訴えかける内容）の両立が重要」と強調した。



80人超が参加し知見を共有